

SHOW HEY シネマールーム

★★★★

エロス+虐殺

1970年/日本映画

配給：ATG/167分

2018 (平成30) 年7月22日鑑賞

シネ・ヌーヴォ

Data

監督・脚本・製作：吉田喜重

出演：岡田茉莉子/細川俊之/高橋

悦史/楠侑子/八木昌子/

稲野和子/松枝錦二/坂口

芳貞/新橋耐子/高木武彦

/伊井利子/原田大二郎/

玉井碧/金内喜久夫/川辺

久造/宮崎和命

■ショートコメント■

◆1967年4月から始まった大阪大学法学部での私の学生生活は、自分から学生運動に飛び込んだため、ピラ作り、アジ演説その他の「活動」が忙しかった。そのため、当時の刺激的な映画には関心が高かったが、映画館に行くことはほとんどできなかった。しかし、その時代には、ATG（日本アート・シアター・ギルド）の製作が始まり、大島渚、岡本喜八、吉田喜重等々による意欲作、話題作が次々と公開されていた。

167分の大作『エロス+虐殺』はその代表作の1つだが、残念ながら、リアルタイムでも修習生時代のビデオ録画でも観ていない。それを、今日はじめてシネ・ヌーヴォで開催中の「ATG大全集」で鑑賞。

◆去る5月22日に観た、瀬々敬久監督の『菊とギロチン』（18年）は、女相撲の女たちとアナキストの若者たちに焦点を当てた意欲作だった。また、3月15日に観た『朴烈（パクヨル）植民地からのアナキスト』（17年）は、そのタイトルどおり、韓国人のアナキストである朴烈とその愛人（内縁の妻）だった日本人の思想家、金子文子による「朴烈・文子事件」を描く刺激的な映画だった。

1923年9月1日に起きた関東大震災の混乱に乗じて、甘粕正彦憲兵隊大尉によって殺害された大杉栄はアナキスト（＝主義者）として有名だが、同時に自由恋愛主義の提唱者兼実践者としても有名だ。

◆しかして、本作には岡田茉莉子演ずるヒロインで、入籍しないまま家庭を持ち大杉の子供を5人も産んだ伊藤野枝の他、青鞥社の平賀哀鳥（稲野和子）と、女流記者の正岡逸子（楠侑子）が登場する。さらに、伊藤の忘れ形見だという魔子（岡田茉莉子）と、それを現在（1969年）の時点からインタビューする若い女性記者、東帯永子（伊井利子）が登場するから、かなり華やか（？）だ。歴史的事実としても大杉の愛情が野枝に移ったことを、才媛として知られていた東京日日新聞の記者、神近市子が嫉妬したことによって生

じた、日陰茶屋事件によって大杉は刺されて重傷を負ったが、さて彼が唱えていた自由恋愛主義とその実践はいかなるもの・・・？

◆本作の『エロス+虐殺』というタイトルは何とも刺激的。そして、その刺激的なタイトル通り、大杉栄（細川俊之）と、伊藤野枝らが生きた1923年という激動の時代の物語と、それから46年後の1969年の今、伊藤野枝の忘れ形見、魔子のインタビューを絡めた物語をクロスさせながらストーリーは進行していく。大杉栄は幸徳秋水亡き後、アナキスト集団を率いるリーダーと期待されたが、本作の「女狂いぶり」を見ていると・・・。

私は吉田喜重監督の映画を本作ではじめて鑑賞。同日、本作に続いて上映された『煉獄エロイカ』（69年）はパスしたが、来週末には『戒厳令』（73年）も鑑賞予定だ。これらの作品は、そのタイトルだけで問題提起性が十分理解できるし、その構成や内容も興味深い。もちろん、最近の出来の悪い日本人観客に迎合したような映画ではないから、何とも難解だが、とにかく見応え十分。なるほど、これだから、本作のような話題作は今でも満席に！

◆シネ・ヌーヴォは番号札に従って入場し、自由席で座るシステムになっている。“危険な暑さ”が続く中、午後2時過ぎに自転車で劇場に到着した私は、汗ビッシヨリになることがわかっていたため、引換券をもらった後トイレに入って下着一式を交換。顔も洗ってスッキリして席に座り本作を鑑賞したが、上映終了後、小銭入れに入れた自転車のカギを出そうとすると、アレレ、ズボンのポケットに小銭入れがない。こりゃ、トイレか通路か座席で落としたもの。きっと、誰かが受付に届けてくれているだろうと信じて申し出たが、届け出はなし。そこで再度リュックの中をはじめ、すべての荷物をチェックしたが、結局小銭入れは出てこなかった。自転車のカギを入れ、チケットとパンフレットを購入するため小銭入れからお金を出して支払い、ズボンのポケットに入れたのは確実だし、落としたとしてもその場所はトイレか通路か座席の下に限定されているはず。そして、シネ・ヌーヴォに本作を観に来ている映画好きのおじさん、おばさんなら、約5000円入っていた小銭入れを拾えば決してネコババせず、受付に届けてくれるはず。そう信じていたが、残念ながら・・・。

ちなみに、私の事務所で昨年12月28日に開催した忘年会に参加したある中国人の友人から、財布を忘れていなかったかと問い合わせがあった際、私は電車や駅で落としたとしても日本なら警察に届け出れば、届け出られる可能性が高い、と説明した。そして現に約1週間後に発見されたとの報告を聞いて、「やっぱり、日本はすごい国だろう」と自慢したものだ。それなのに、まさかシネ・ヌーヴォのような良質な映画館で、かつ、本作のような名作で満席となった時に、トイレ、通路、座席で紛失したこと確実な小銭入れが届け出されないとは・・・。日本人のおじさん、おばさんたちに対する私の“信用”は一気にガタ落ちに・・・。

2018（平成30）年7月26日記